

IV 養豚分析結果 —養豚経営の収益性動向—

1. 近年の収益動向とその要因

養豚経営の過去6年間（平成15年度から20年度）の成雌牛1頭当たりの収益性とその要因について、全体推移のほか、種雌牛飼養頭数規模別、家族労働力1人当たり年間経常所得別の2点からも分析した。

なお、基本的な数値は種雌豚1頭当たりで表記しているので留意されたい。

1) 収益水準の動向

(1) 経営の概要

表1は、養豚経営の経営概要をまとめた。

表1 経営の概要

年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度
集計戸数(戸)	60	71	58	72	67	61
労働力(人)						
労働力員数	2.0	2.2	2.5	2.9	2.9	2.8
うち家族員数	1.7	1.8	1.7	2.1	2.1	2.1
飼養頭数(頭)						
種雌豚	74.6	94.6	96.0	111.4	120.6	107.9
種雄豚	6.2	7.6	8.6	8.1	8.5	8.8
候補豚	5.1	7.0	10.7	11.1	8.9	8.1
子豚	202.6	350.4	264.2	310.8	319.2	261.6
肥育豚	573.5	1,213.8	700.2	827.0	908.4	911.1
出荷頭数(頭)						
子豚	19.5	19.2	22.9	1.5	7.1	4.2
肥育豚	1,324	1,738	1,699	1,973	2,144	2,033
候補豚	2	1	2	6	6.7	0.3

- ① 6カ年間の集計戸数は、昨今の飼養戸数の減少を反映させ、おおむね60～70戸程度で推移している。
- ② 労働力員数は15年度に2.0人であったが、19年度には2.9人、20年度には2.8人となっており、漸次増加の傾向がみられる。併せて、うち家族員数についても同様の傾向がみられ、15～17年度は1.7人程度であったものが、18～20年度には2.1人まで増加している。
- ③ 種雌豚の飼養頭数についても、市場価格の堅調な推移を背景に15年度の74.6頭から19年度の120.6頭まで漸次増加の傾向がみられていたが、配合飼料価格が高騰した平成20年には107.9頭となった。
- ④ 肥育豚の飼養頭数については、16年度が最も多かったものの、種雌豚飼養頭数の増加に比例し、漸次増加傾向にある。

(2) 収益性

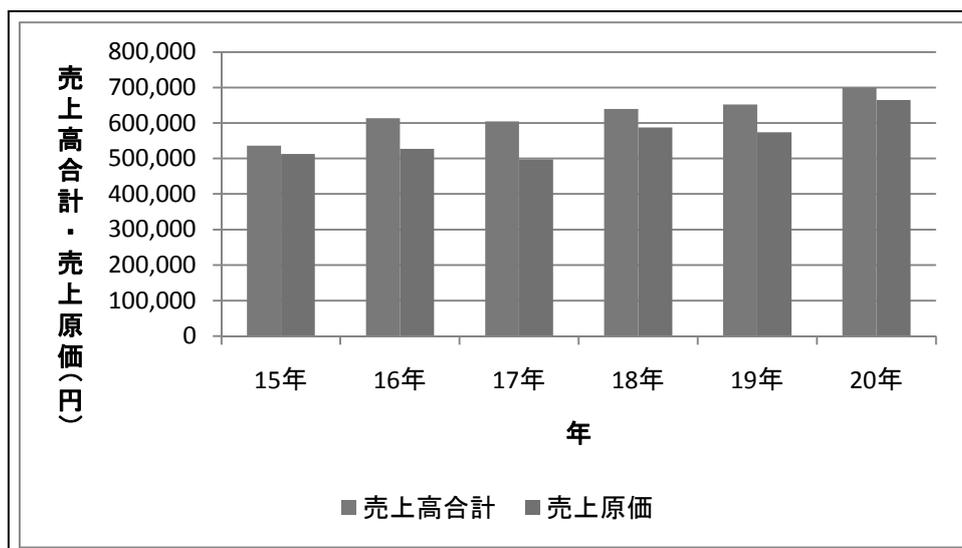


図1 売上高合計と売上原価の推移 (種雌豚 1 頭当たり)

- ① 肥育豚販売収入は売上高の 95%以上を占め、その増減は豚枝肉市場価格に影響される。そのため、市場価格が堅調に推移を続けたこともあり、肥育豚販売収入も 18 年度からは 60 万円を超えている。しかしながら、18 年度以降は配合飼料価格の高騰の影響を大きく受けており、購入飼料費の金額をみると 20 年度は 46 万円で、17 年度の 32 万円に比べて 14 万円も高騰している。
- ② その結果、通常、購入飼料費は売上原価の 60%程度であるが、19~20 年度には 70%となり、売上原価を大きく押し上げている。

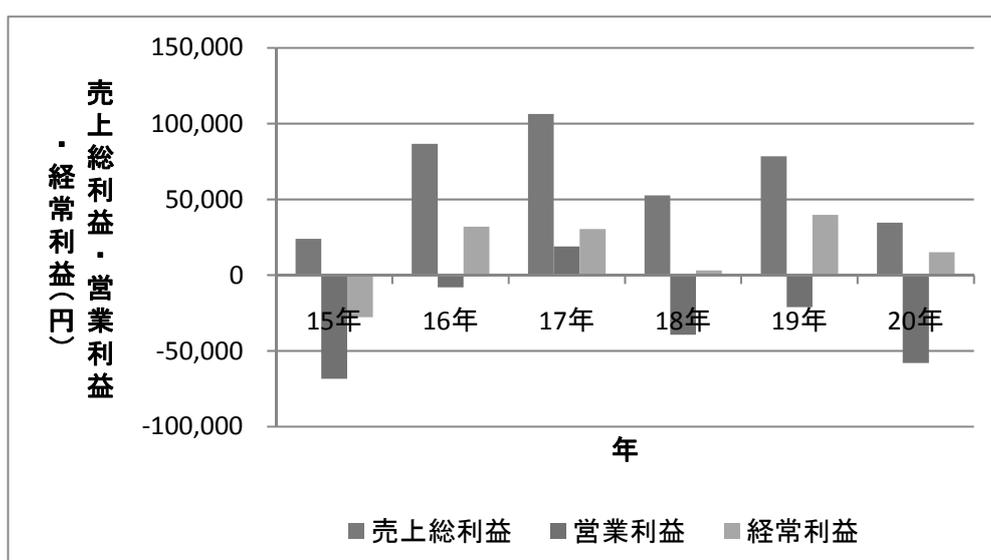


図2 売上総利益、営業利益および経常利益の推移 (種雌豚 1 頭当たり)

- ① 売上総利益は17年度には高くなっているものの、年度間の変動も大きかった。
- ② 営業利益は17年度以外すべてマイナスとなっており、15年度では経常利益もマイナスとなった。
- ③ 18年度以降の営業利益は、家族労働費を加えることで、経常所得はプラスに転じているものの、経営的には厳しい状況が続いている。

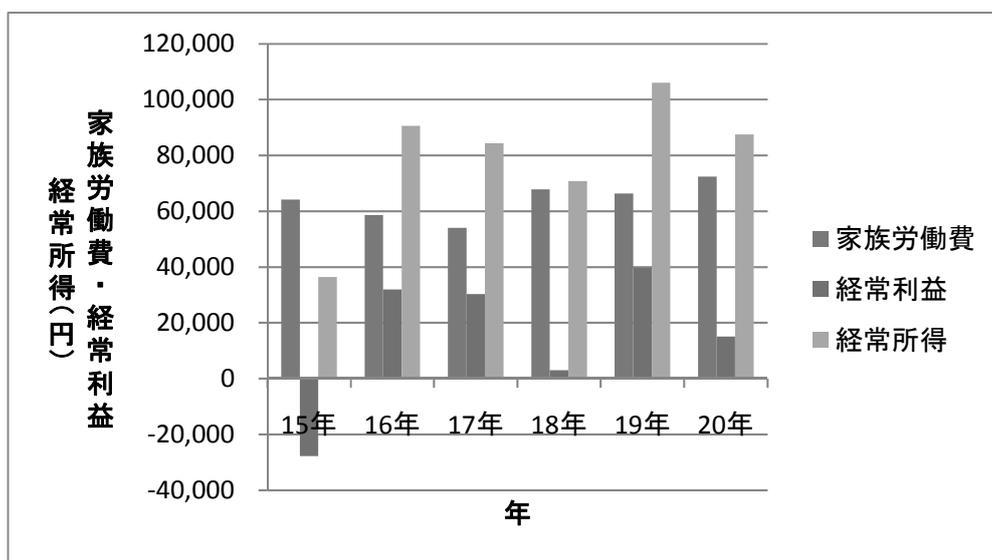


図3 家族労働費、経常利益および経常所得の推移 (種雌豚1頭当たり)

- ① 家族労働費は15～19年度まで7万円以下で推移してきたが、20年度に7万円を超えることとなった。
- ② 経常所得は15年度を除けば、種雌豚1頭当たり7～10万円で推移している。

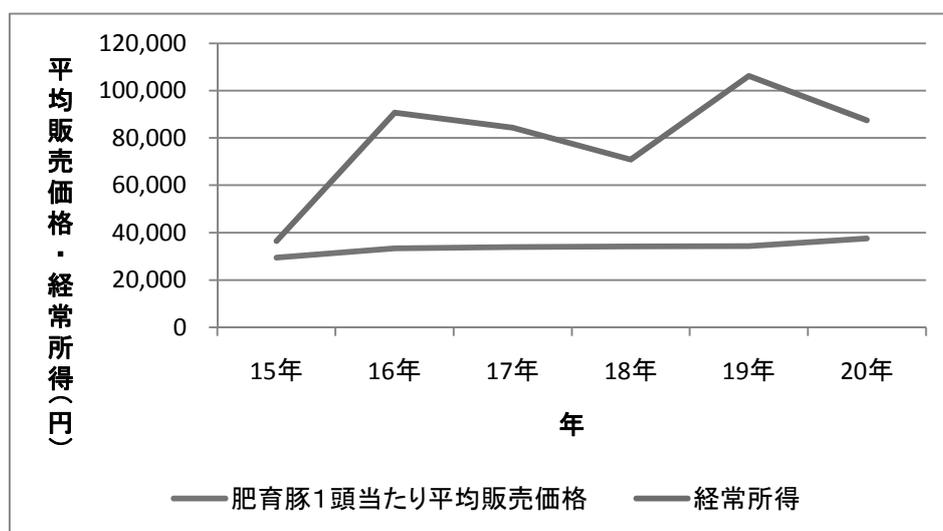


図4 肥育豚1頭当たりの販売価格と経常所得 (種雌豚1頭当たりの推移)

- ① 肥育豚1頭当たりの販売価格は、種雌豚1頭当たりの肥育頭数とともに肥育豚販売収入を大きく左右する。そして経常利益に最も影響をし、経常所得の増減の要因となっている。肥育豚1頭当たりの平均販売価格は、15年度の2万9千円から回復基調となり、20年度には3万7千円となった。
- ② 経常所得も増加傾向を辿り、19年度には10万6千円となった。翌年は購入飼料費をはじめとする売上原価の上昇により8万7千円となった。

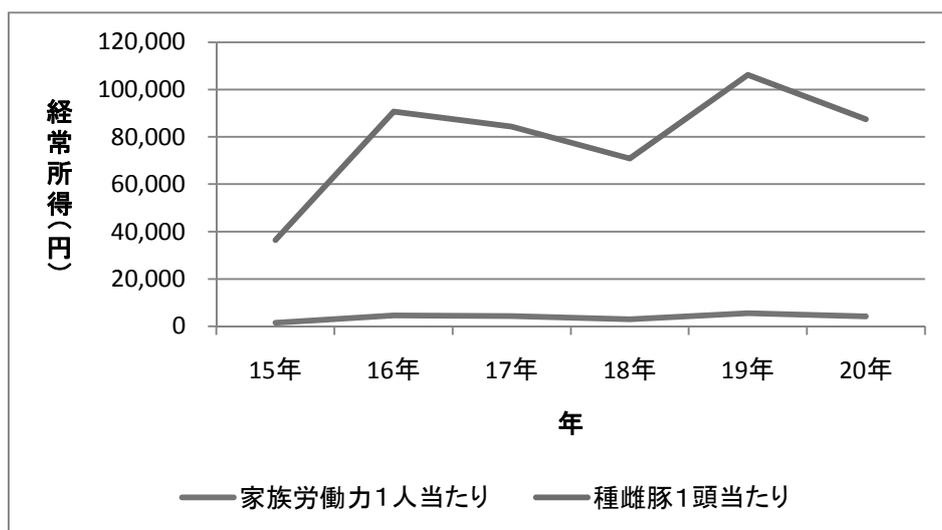


図5 家族労働力1人当たり及び種雌豚1頭当たり経常所得

- ① 家族労働力1人当たりの年間経常所得と種雌豚1頭当たりの経常所得については、15年度以降順調に推移し、5千円台にも入ったが、18年度は前年比で約6万円増の購入飼料費の影響を受け、経常所得にも影響を与えている。

(3) 生産性

表2 繁殖成績および肥育成績の推移

	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度
種雌豚1頭当たり年間平均分娩回数(回)	2.1	2.2	2.2	2.2	2.2	2.2
種雌豚1頭当たり年間哺乳開始頭数(頭)	18.7	19.0	22.0	19.9	22.8	23.1
1腹当たり分娩頭数(頭)	11.0	11.8	10.6	11.2	11.0	11.1
1腹当たり離乳頭数(頭)	8.2	8.6	9.0	9.5	9.6	9.5
種雌豚1頭当たり年間子豚離乳頭数(頭)	17.2	19.0	19.9	20.9	21.1	20.8
子豚育成率(哺乳開始～離乳)(%)	91.4	90.7	89.9	90.5	89.7	89.5
種雌豚1頭当たり年間肥育豚販売頭数(頭)	17.7	18.0	17.7	18.4	18.5	18.6
販売肥育豚1頭1日当たり増体重(g)	706	674	639	608	632	644
枝肉規格「上」以上適合率(%)	50.6	50.5	38.6	56.5	56.6	61.4
対常時頭数事故率(%)	16.1	14.3	14.1	8.8	11.5	15.1
飼料要求率	3.14	3.24	3.27	3.05	3.07	3.08
肥育豚1頭当たり販売価格(円)	29,513	33,317	33,880	34,159	34,252	37,480

- ① 年間の平均分娩回数と1腹当たりの分娩頭数は大きな変化はなかった。
- ② 哺乳開始頭数は19～22頭で推移していたが、20年度には23.1頭まで増加した。
- ③ 年間肥育豚販売頭数は15年度、17年度で17.7頭であったが、平成20年は18.6頭まで増加した。
- ④ 枝肉規格「上」以上適合率は、17年度を除いて50%台で推移しているが、20年度については61.4%となっている。

(4) 施設投資・資金借入状況

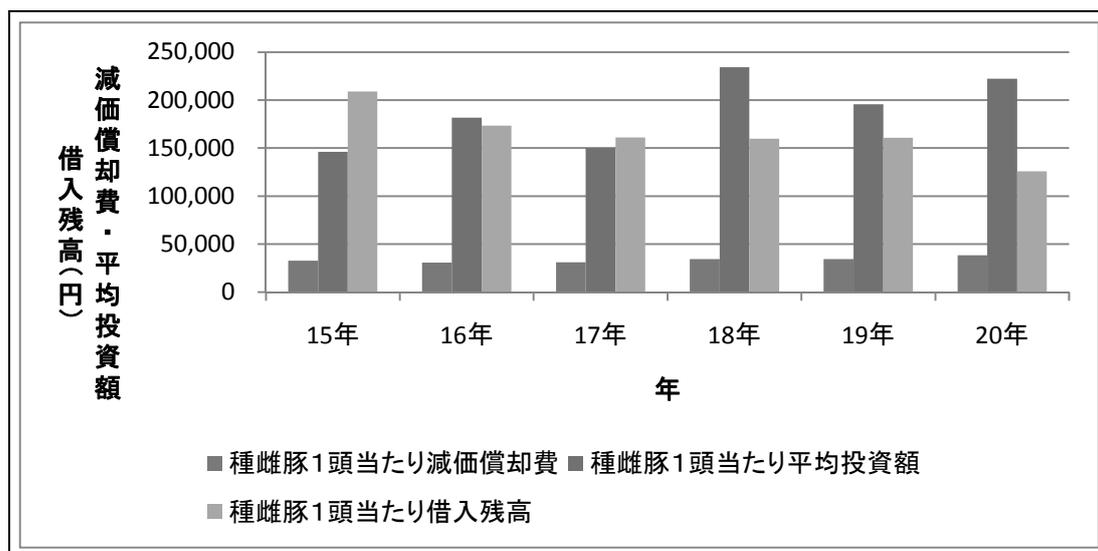


図6 減価償却、平均投資額および借入残高の推移（種雌豚1頭当たり）

- ① 減価償却は大きな変化は認められなかったものの、平均投資額は豚価が堅調に推移したことを背景に平成18年以降は増加傾向がみられている。
- ② 借入残高は、減少傾向を辿り平成15年に20万円であったが、平成20年には12万円となった。

2) 収益性と市場動向の関係

(1) 飼料価格動向と購入飼料、燃料費の年度別変動状況

配合飼料価格（肉豚肥育用）と全国集計データの種雌豚1頭当たり購入飼料費、燃料費について、15年度を100としてその変動をみた。

配合飼料価格と購入飼料費は、16年度に上昇、17年度にやや下落したが、18年度からは再び上昇に転じている。20年度はともにピークを迎え、15年度比で配合飼料価格は150%を超え、購入飼料費も140%を超えている。

燃料費については、18年度に150%を超えるほどの大幅な上昇をしており、これが影響し、19年度、20年度の大幅な購入飼料費の上昇につながっていることがうかがえる。

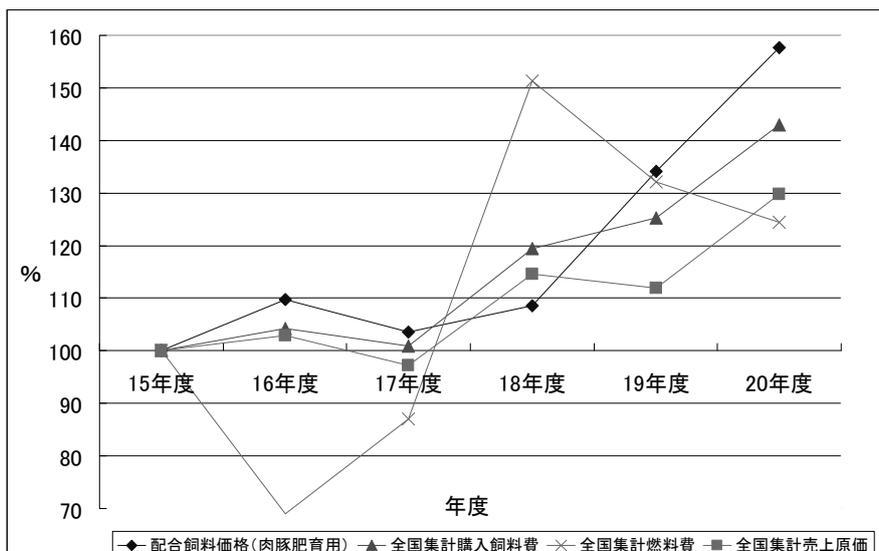


図1 配合飼料価格と購入飼料費、燃料費の年次別変動状況

※1：各年度の値は、4～3月の平均値である。

※2：配合飼料価格は、畜産振興課「流通飼料価格等実体調査」の肉豚肥育用農家小売価格（社団法人配合飼料価格安定機構HP提供データを活用）。バラ1t当たり。

(2) 枝肉価格相場と肥育豚販売価格の年度別変動状況

次に、枝肉価格相場（中央卸売市場、指定市場）と全国集計データの肥育豚販売価格について、15年度を100としてその変動をみた。

価格相場、全国集計データともに、16年度に大幅に価格が上昇し、その後、17、18年度はやや上昇している。市場価格は、19年度にピーク（15年度比約25%増）を迎え、20年度は下落しているが、全国集計データは19年度は18年度からほぼ横ばいであり、20年度に上昇し、15年度比約25%増になっている。

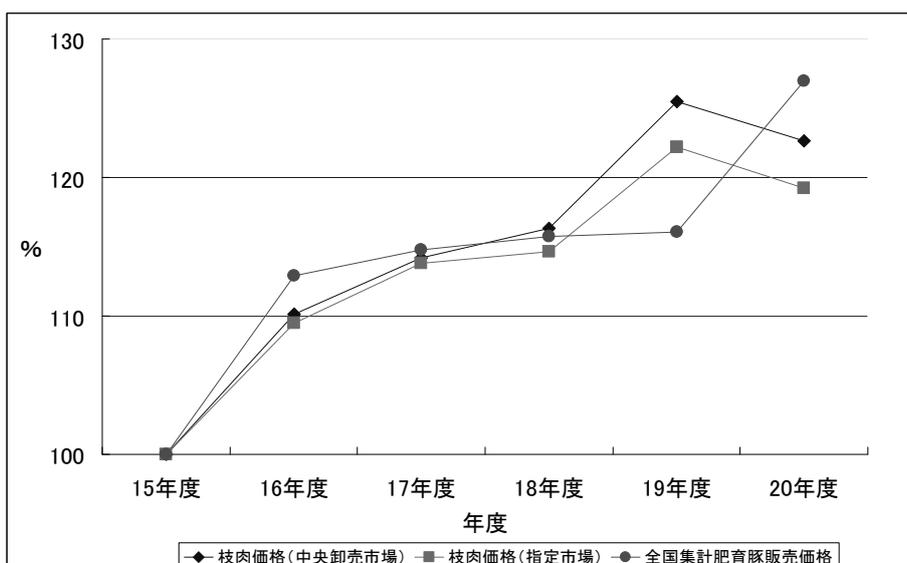


図2 肉用子牛相場と販売・保留価格の年次別変動状況

※1：各年度の値は、4～3月の平均値である。

※2：枝肉価格は、農林水産省大臣官房統計部「畜産物流通統計（平成15年1月～20年12月）」より年当たりの平均値を算出。1kg当たり平均卸売価格。

3) 種雌豚飼養頭数規模別の収益性の推移とその要因

(1) 経営の概要 (平成20年度)

表3 種雌豚飼養頭数規模別の経営概要

種雌豚飼養頭数規模別の経営概要		全体	10~40頭	40~50頭	50~70頭	70~100頭	100~150頭	150~200頭	200頭~
平成20年度 集計戸数									
%		61	4	8	14	12	12	5	6
		100.0%	6.6%	13.1%	23.0%	19.7%	19.7%	8.2%	9.8%
労働力	労働力員数(人)	2.8	1.7	1.9	1.9	2	2.9	3.4	7.4
	うち家族員数(人)	2.1	1.6	1.8	1.8	1.8	2.4	2.4	3
飼養頭数	種豚								
	雌(頭)	107.9	35.6	45	61.8	89.4	123.8	169.4	302
	雄(頭)	8.8	3.6	4.8	4.5	8.1	8.6	14.5	25.1
	候補豚(頭)	8.1	1.8	3.9	2.9	11.1	4.7	9.6	30.2
	子豚(頭)	261.6	63.8	122.1	176.6	232	291.7	361	693.8
出荷頭数	肥育豚(頭)	911.1	267	373.8	467.5	784.4	1126.7	1374.6	2527.5
	子豚(頭)	4.2	15.5	0	0	0	16.3	0	0
	候補豚(頭)	2032.8	480.5	821.3	1159.6	1753.7	2418.9	3315.6	5437.7
		0.3	0	0	0.2	0	1.1	0	0

- ① 集計戸数 61 の平均種雌豚飼養頭数は 107.9 頭、種雌豚飼養規模の割合は 70~100 頭以上が 57.4% で全体の半数以上を占めている。
- ② 平均労働力員数は 2.8 人 (うち家族員数 2.1 人)、雇用労働力は 100~150 頭で 0.5 人、150~200 頭で 1.0 人、200 頭~4.4 人であった。

(2) 収益性の比較

表4 養豚一貫経営の収益性

		種雌豚年1頭当たり	
		平成19年	平成20年
集計年度			
集計戸数		67	61
種雌豚飼養規模		121	108
売上高	子豚販売収入	1,233	1,216
	肥育豚販売収入	629,046	692,673
	候補豚販売収入	3,488	212
	その他	18,362	5,071
	計	652,129	699,173
売上原価	期首飼養豚評価額	151,889	159,031
	種付料	1,279	767
	もと畜費	18,814	15,275
	購入飼料費	403,263	460,634
	自給飼料費	0	0
	敷料費	1,375	1,522
	労働費	76,660	83,306
	診療・医薬品費	25,373	29,423
	電力・水道費	20,660	20,488
	燃料費	9,804	9,231
	減価償却費	34,442	38,420
	その他	7,227	7,430
	当期生産費用合計	622,408	685,881
	期中種豚振替額	50,584	12,250
	期末飼養豚評価額	149,865	168,051
売上原価	573,847	664,611	
売上総利益	78,282	34,562	
販売費・一般管理費	99,505	92,477	
営業利益	-21,223	-57,915	
営業外収益	79,137	88,192	
営業外費用	18,145	15,186	
経常利益	39,769	15,092	
経常所得	106,115	87,487	
当期償還額控除所得	90,863	76,151	
同上償却費加算額	125,305	114,570	
家族労働力1人当たり年間経常所得(千円)	5,532	4,271	

- ① 20年度の19年度に対する売上高合計は、種雌豚1頭当たりでは7.2%の増加であった。
- ② 20年度、19年度の売上高に占める種雌豚1頭当たりの肥育豚販売収入は96%だったが、20年度には99%となり、子豚および候補豚の販売収入は圧縮されている。
- ③ 20年度の19年度に対する売上原価は種雌豚1頭当たりで15.8%増加となった。その要因は購入飼料価格の上昇で14.2%の上昇である。
- ④ 20年度の19年度に対する損益は、種雌豚1頭当たりの売上総利益で44.2%の大幅な減少となった。

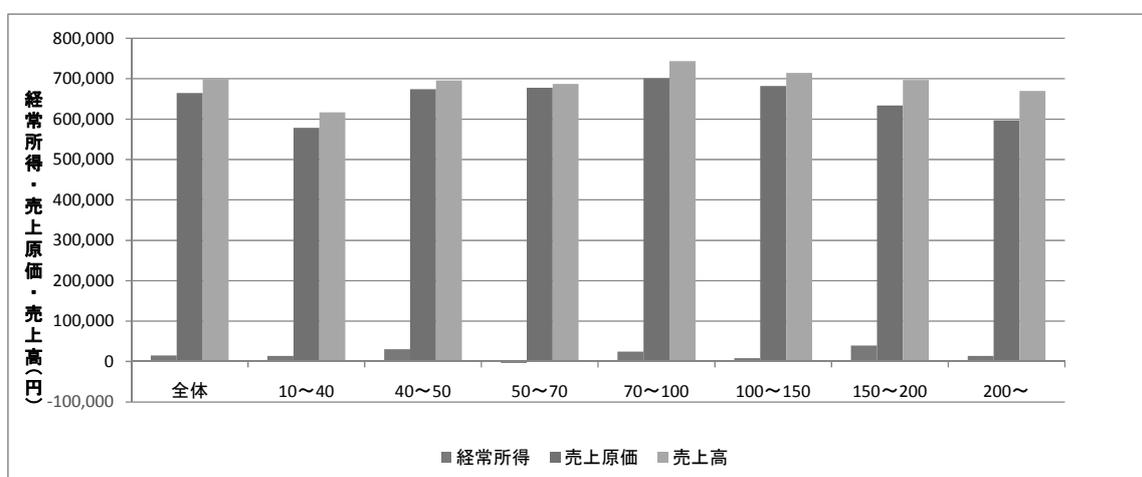


図7 種雌豚1頭当たりの売上高、売上原価、経常所得（平成20年）

- ① 売上高は肥育豚販売と子豚販売を主とする10~40頭規模を除くとおおよそ70万円で推移しているが、70~100頭規模では74万円とやや高くなっている。
- ② 売上原価は購入飼料費の増加の影響を受けていることが見受けられるが、70~100頭規模は70万円を超え顕著で際立って高くなっているもの、200頭以上の層では60万円とスケールメリットを生かした調達が行われていることがうかがえる。
- ③ 経常所得は売上原価の上昇等の影響を受け、50~70頭規模ではマイナスとなった一方で150~200頭規模では4万円となっている。

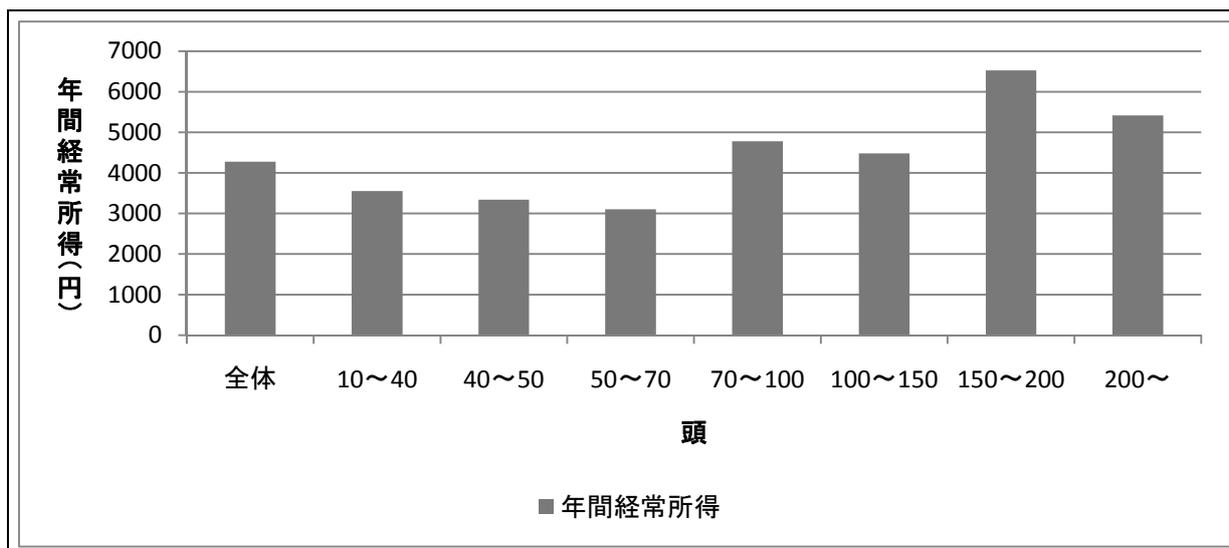


図8 家族労働力1人当たり年間経常所得 (平成20年)

① 家族労働力1人当たり年間経常所得については、堅調に推移しているものの50～70頭規模では最も低く310万円であるものの、150～200頭規模では652万円と倍以上の差が生じている。

(3) 生産性 (繁殖・肥育技術) の種雌豚飼養規模別比較

表5 種雌豚飼養規模別にみた繁殖・肥育成績 (種雌豚1頭当たり、平成20年度)

種雌豚飼養規模	全体	10~40頭	40~50頭	50~70頭	70~100頭	100~150頭	150~200頭	200頭~
分娩回数(回)	2.2	2.2	2.2	2.1	2.2	2.3	2.3	2.2
1腹当たり分娩頭数(頭)	11.1	9.9	10.8	11.3	11.3	11.3	10.6	11
哺乳開始頭数(頭)	23.1	20.1	22.5	22.8	24.5	23.3	23.7	22.4
離乳頭数(頭)	20.8	17.3	19.8	20.2	22.2	21.7	21.6	20.6
離乳育成率(%)	89.5	87.7	87.9	89.8	89	89.6	90.3	92
「上」以上適合率(%)	61.4	51.7	53.3	61.9	56.8	64.8	66.3	69.5
枝肉格落率(%)	17.7	1.7	15.3	18.3	17.7	14.5	17.3	32.5
飼料要求率	3.08	3.16	3.24	3	3.12	3.06	3.16	2.86
1日平均増体重(g)	644	557	625	641	637	635	722	677
対常時頭数事故率(%)	15.1	18.7	22.8	19.1	13.4	12.2	6.1	9.9
肥育回転率(%)	2.35	1.89	2.46	2.66	2.27	2.2	2.43	2.19
平均肥育日数(日)	168	208	172	169	170	169	149	157
労働力1人当たり肥育飼養頭数(頭)	356.9	184.8	219	282.5	456.5	423.3	515.6	364.6
肥育豚販売頭数(頭)	2032.8	480.5	821.3	1159.6	1753.7	2418.9	3315.6	5437.7
肥育豚1頭当たり販売価格	37,480	45,187	39,058	36,249	37,855	36,026	35,316	37,074
肥育豚1頭当たり売上原価(円)	664,611	578,725	673,698	677,746	700,898	681,971	633,971	597,343
肥育豚1頭当たり経常利益(円)	15,092	13,987	30,655	-3,799	24,141	8,502	39,488	13,908
肥育豚1頭当たり経常所得(円)	87,487	127,941	132,099	76,262	84,873	82,080	82,447	47,465

① 分娩回数は2.1～2.3回で階層間での大きな違いはみられない。
 ② 哺乳開始頭数、離乳頭数についても階層間で大きな違いは見られないものの、70～100頭の技術成績は他の階層よりも高い。同様に離乳育成率も種雌豚飼養頭

数が増えるほど成績がよくなる傾向がみられた。

- ③ 「上」以上適合率については、種雌豚飼養頭数規模が大きくなるほど成績がよくなる傾向が見受けられる一方で、200頭以上層の枝肉格落率の高さが際立っている。

飼料要求率についてはおおむねどの階層でも3.1～3.3程度であるが、200頭以上の層では2.86という好成績を示している。

- ④ 肥育豚1頭当たりの経常所得は、200頭以上層が4万7千円と一番低く、40～50頭層で13万円と一番高い。

また、経常所得からみると繁殖成績との関連性は見出すことができない。

4) 家族労働力1人当たり年間経常所得別の収益性の推移とその要因

(1) 収益性の比較

表6 養豚一貫経営の収益性（平成20年度・上位20%）

集計年度		種雌豚年1頭当たり		
		全体	上位20%	
集計戸数		61	13	
種雌豚飼養規模		107.9	168.0	
売上高	子豚販売収入	1,216	88	
	肥育豚販売収入	692,673	749,907	
	候補豚販売収入	212	805	
	その他	5,071	3,927	
	計	699,173	754,727	
売上原価	期首飼養豚評価額	159,031	142,999	
	当期生産費用	種付料	767	1,056
		もと畜費	15,275	12,671
		購入飼料費	460,634	460,740
		自給飼料費		
		敷料費	1,522	427
		労働費	83,306	74,078
		診療・医薬品費	29,423	28,212
		電力・水道費	20,488	21,986
		燃料費	9,231	6,135
		減価償却費	38,420	37,771
	その他	7,430	7,409	
	当期生産費用合計	685,881	667,413	
	期中種豚振替額	12,250	15,306	
	期末飼養豚評価額	168,051	152,446	
売上原価	664,611	642,661		
売上総利益		34,562	112,067	
販売費・一般管理費		92,477	102,980	
営業利益		-57,915	9,086	
営業外収益		88,192	77,077	
営業外費用		15,186	10,922	
経常利益		15,092	75,241	
経常所得		87,487	133,046	
当期償還額控除所得		76,151	124,288	
同上償却費加算額		114,570	162,059	
家族労働力1人当たり年間経常所得(千円)		4,271	10,725	

- ① 家族労働力1人当たり年間経常所得の上位20%層をみると、種雌豚飼養頭数規模は168頭で、全体層よりも60頭も多く、大規模経営が所得の上位階層を牽引している。
- ② 上位20%層の肥育豚販売収入は全体に比べ、6万円弱高く販売している。
- ③ 当期生産費用の購入飼料費については、全体層も上位20%層も差はみられないものの、上位20%層では、生産費用の各項目間の全体的なコスト低減が図られていることが見受けられる。

(2) 繁殖成績および肥育成績

表7 繁殖成績および肥育成績(平成20年度・上位20%)

	全体	上位20%
種雌豚1頭当たり年間平均分娩回数(回)	2.2	2.3
種雌豚1頭当たり年間哺乳開始頭数(頭)	23.1	24.6
1腹当たり分娩頭数(頭)	11.1	11.1
種雌豚1頭当たり年間子豚離乳頭数(頭)	20.8	22.5
子豚育成率(哺乳開始～離乳)(%)	89.5	92.1
種雌豚1頭当たり年間肥育豚販売頭数(頭)	18.6	20.5
販売肥育豚1頭1日当たり増体重(g)	644	678
枝肉規格「上」以上適合率(%)	61.4	64.0
対常時頭数事故率(%)	15.1	11.2
飼料要求率	3.08	3.15
肥育豚1頭当たり販売価格(円)	37,480	36,595

- ① 上位20%階層は全体層と比較してみても、種雌豚1頭当たりの年間平均分娩間隔や1腹当たり分娩頭数は大きな差が見られない。
- ② しかし、上位20%階層では子豚育成率が全体層に比べ3%弱高く、年間子豚離乳頭数や年間肥育豚頭数に影響を与えている。
- ③ 枝肉規格「上」以上適合率及び対常時頭数事故率も上位20%階層では全体層に比べ高く、肥育豚1頭当たり販売価格は僅かながら全体層を下回っているものの、良好な繁殖・肥育成績が収益性を高めていることが明らかになっている。

2. 課題別分析

1) エコフィード等の活用の有無による収益性の比較

資源循環型社会の進展に伴い、畜産経営、なかでも中小家畜においては、低・未利用資源（エコフィード）の積極的な活用が求められている。また、昨今の配合飼料価格の高騰はこのような動きを後押ししている。

次に低・未利用資源を活用している経営の収益性等についてその傾向を見てみたい。ただし、分析対象事例数は限られているため、利用にあたっては注意されたい。なお、分析対象期間は平成20年度データである。

(1) 低・未利用資源活用経営の概要（20年度）

表8 経営の概要【低・未利用資源の活用の有無】

	全体	有	無
集計戸数(戸)	62	16	42
労働力(人)			
労働力員数	2.7	3.8	2.5
うち家族員数	2.1	2.4	2.0
飼養頭数(頭)			
種雌豚	106.6	168.9	87.0
種雄豚	8.8	13.8	7.2
候補豚	8.0	18.7	4.4
子豚	259.1	441.8	204.7
肥育豚	896.4	1443.4	711.3
出荷頭数(頭)			
子豚	11.8		17.4
肥育豚	2000.0	3238.9	1589.2
候補豚	0.3	0.8	0.1

- ① 対象経営62戸のうち、低・未利用資源活用を行っている経営は16件(25.8%)、行っていない経営は42件(67.7%)、未回答の経営は4件(6.5%)であった。
- ② 低・未利用資源活用を行っている経営の種雌豚平均飼養頭数は170頭弱、活用を行っていない経営の種雌豚平均飼養頭数は90頭弱で、大規模層での低・未利用資源の活用が進んでいるといえる。

(2) 購入飼料費と経常所得の比較（20年度）

表9 購入飼料費と経常所得【低・未利用資源活用の有無】

	全体	有	無
売上高合計	693,162	696,340	685,818
購入飼料費	456,901	430,311	464,120
当期生産費用合計	681,105	672,821	682,689
売上原価	660,068	652,462	662,433
売上総利益	33,095	43,878	23,385
経常所得	88,423	57,827	94,848

- ① 種雌豚1頭当たりの年間飼料購入費をみると、活用を行っている経営では43万円、活用を行っていない経営では46万円となっており、活用をしている経営の種雌豚1頭当たり3万円程度の低減となっている。
- ② しかし、当期生産費用の合計と売上原価をみると、低・未利用資源の活用は1万円程度の低減にとどまっている。
- ③ 売上総利益は、活用している経営においては4万3千円で、活用していない経営よりも2万円高となっている。
- ④ 経常所得は、活用している経営において5万7千円、活用していない経営で9万4千円となっている。これは、活用している経営の飼養頭数規模が大きいことから労働費が低減されており、このことによる影響である。

(3) 繁殖成績および肥育成績の比較 (20年度)

表10 繁殖成績および肥育成績の推移【低・未利用資源活用の有無】

	全体	有	無
種雌豚1頭当たり年間平均分娩回数(回)	2.2	2.3	2.2
種雌豚1頭当たり年間哺乳開始頭数(頭)	23.0	23.5	22.6
1腹当たり分娩頭数(頭)	11.0	11.0	11.0
種雌豚1頭当たり年間子豚離乳頭数(頭)	20.7	21.5	20.4
子豚育成率(哺乳開始～離乳)(%)	89.6	89.4	90.1
種雌豚1頭当たり年間肥育豚販売頭数(頭)	18.3	19.0	17.7
対常時頭数事故率(%)	14.9	10.2	16.3
肥育豚1頭当たり販売価格(円)	36,876	36,257	37,292
肥育豚生体1kg当たり販売価格(円)	332	324	337
枝肉単価(円)	492	486	498
枝肉規格「上」以上適合率(%)	61.4	63.3	60.7
枝肉格落率(%)	17.7	29.4	13.1
飼料要求率	3.08	2.94	3.10
販売肥育豚1頭1日当たり増体重(g)	644	652	646
平均肥育日数(日)	167	167	166
平均出荷日数(日齢)	193	188	195

- ① 肥育豚生体1kg当たりの販売価格及び枝肉単価でみると、低・未利用資源の活用・未活用に差は認められない。
- ② 枝肉規格「上」以上適合率についても、活用・未活用での差は認められないが、一方で、活用における枝肉格落率は29%と高い結果となっている。これは、飼養頭数の大規模階層で枝肉格落率が高い傾向であることと同じ傾向を示している。
- ③ 飼料要求率をみると、低・未利用資源の活用で2.94と未活用を上回っており、1頭1日当たり増体重も652gと好成績である。
- ④ 平均肥育日数においても低・未利用資源の活用・未活用の差は認められない。
- ⑤ 平均出荷日数も低・未利用資源の活用で188日と未活用より7日間短縮されている。

3. まとめ

前述のとおり、平成 20 年度の家族労働力 1 人当たり年間経常所得をみると上位 20%では、種雌豚平均飼養頭数 170 頭程度の大規模経営が上位層を牽引しており、本階層では生産費用の各項目間の全体的なコストの低減が図られていることが明らかとなった。

これは、この階層では非常に精密な経営管理が行われており、それらがコストや繁殖・肥育成績に反映しているものと推察される。

特にこの階層は、繁殖成績および肥育成績の高さに著しく表れている。

種雌豚 1 頭当たりの年間平均分娩回数や 1 腹当たりの分娩頭数は全体層との比較でも差がないものの、年間哺乳開始頭数で 1.5 頭、年間子豚離乳頭数で 1.7 頭、子豚育成率で 2.6%と全体層の数値を上回っている。

これは、本階層で分娩前の種雌豚の飼養管理や分娩後の子豚の飼養管理が緻密かつ適切に行われていることがうかがわれる。

また、課題別分析で明らかになったように、低・未利用資源の活用を実施しているのも、この階層と密接に関連している。昨今の配合飼料価格の高騰に対しても、積極的に低・未利用資源の活用をしているのは本階層であり、種雌豚 1 頭当たり 3 万円程度の低減が図られていた。

今後の支援指導にあたり、さらなる子豚育成率の向上のための方策並びに購入飼料費の低減のための低・未利用資源の活用等についても検討が必要になろう。